

ついのべ抄

#005

プラネタリウムなんていつ振りに来るのだろう。

幼かった記憶の中のものから

すっかり様変わりしていた。

外観も、シートの座り心地も、

隣でワクワクする君も。

星々の物語を紡ぐ女性館員の声だけが、

変わらずに耳に転がる。

心を3センチ動かしたら、
ウキウキしてきた。

また3センチ動かしたら、
可笑しくてたまらなくなつた。

さらに3センチ動かしたら、
涙が止まらなくなつた。

もう3センチ動かしたら、
腸が煮えくり返つた。

それから3センチ動かして、
もう指先ひとつ動かす事すら億劫になつた。

始まりはきつと小さな我俣だったはずだ。

それはころころ転がりながら、

胸のあちこちに落ちていたものをぺたぺたくつつけて、
やがてとても大きくなってしまっていた。

「新しい恋人によろしく」

笑う貴方の後ろ姿を見て、

嘘の副産物とはこうも痛いものなのだと

初めて知った。

いつからだろう、

耳の奥からカチカチと螺子の音が聴こえていたのは。
辺りが静かになると聴こえてくる。

ここ最近になって

螺子の音がゆつくりとなつてゐる事に気付いた。

カチ、カチ。

まるで僕が螺子巻き人形で、

螺子がゆつくりなのは、

僕の螺子が、

もうすぐ、

切れ（カチン）

私が知っている私はいつだつてぼおゝつとしている。

たまにはしゃつきりしてごらんよと横つ面を払うと、

今まで見たことのない素早い動きで、

かわしたところでつまずいて、

緩やかに視界から消えた。

水面に垂らした釣り糸はぴくりともしない。

真夏の日差しと蝉時雨に晒された身は、

ここが川辺でなかったら

とつくに限界を越えているはずだ。

かれこれ1時間強。

昔出会った河童はまだ現れない。

引き上げた糸からぶら下がるキュウリは瑞々しく、

雫を垂らしながら涼しげに揺れた。

あなたへの想いを、

開け放った窓から大遠投。

明日になっても変わらなければ

また拾いに行きます。

日向ぼっこしよう。

草っぱらで転がって、全身草まみれになって。
服の中に何かあるなと見たら変な虫で、

「うへい」

と悲鳴上げて放り投げるのさ。

そしたら隣りのきみも

「うへい」

と嬉しそうに飛び上がる。

屋上の給水塔によじ登った彼は
人差し指を突き上げ言い放った。

「テストは赤点でも、

今俺は学校で一番高い場所にいる！」

「バカとハサミか」

「それを言うならバカと煙だ」

呆れ顔で言う彼の人差し指にトンボが止まった。

眠れない夜に羊を数える。

羊が1匹、羊が2匹。

やがて96匹目がダンスを舞い、

177匹目が歌い出す。

191匹目が宇宙船にまたがれば

192匹目、193匹目が我も我もと乗り込んだ。

置いてけぼりを食らってしまった僕は

月へと飛ぶ光を見上げて呆然とするばかり。

ついのべ抄

#005

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2011

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

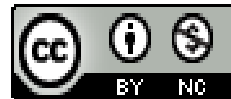
Release Date 2011/6/5

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「ついのべ抄 #005」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>